みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

福音伝道と文明化：19世紀アメリカン・ボードの宣教思想

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 和芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001578

杉本良男編『キリスト教と文明化の人類学的研究』
国立民族学博物館調査報告　62:203-224(2006)

福音伝道と文明化
19世紀アメリカン・ボードの宣教思想

中山　和芳
東京外国語大学外国語学部

はじめに
1　アメリカ先住民に対する宣教活動
2　ハワイにおける宣教活動
3　ルーファス・アンダーソンの宣教思想
4　19世紀末期の宣教思想
おわりに

はじめに

アメリカにおけるキリスト教の海外伝道は，1810年にニューイングランドの会衆派教会が中心となって，アメリカ海外伝道局（American Board of Commissioners for Foreign Missions：以下ではアメリカン・ボードと略記する）を設立したことに始まる。アメリカン・ボードの設立は，若者たちの宗教的情熱によるところが大きかった。会衆派の指導者たちに海外伝道を促したのは，アンドーヴァー神学校の学生たちであった。宣教師を志す彼らは，1810年の会衆派の年次総会で海外伝道開始の請願書を提出した。そして，この請願を受諾する形で，アメリカン・ボードが設立されたのである。

実際に，アメリカン・ボードが宣教師を派遣したのは1812年が最初で，アドニラム・ジャドソン夫妻をはじめとする3組の夫妻と独身男性2人の宣教師たちがインドに向かった。ジャドソン夫妻と一人の独身男性がインドでバプテスト派に改宗してアメリカン・ボードを離れた。その他の宣教師はボンベイ（現ムンバイ）に移り，とりあえず英語を教えることから宣教活動を始め，キリスト教徒でない現地人の教師による現地語の学校を作った。アメリカン・ボードはその後，1820年にハワイ，中近東で，1830年に中国の広東，1831年に東南アジア，1833年にアフリカ，1852年にミクロネシア，1869年に日本でと，世界の各地で布教を行なった。

アメリカン・ボードには，1812年に長老派が，1826年にオランダ改革派が加わった。しかし，1837年に長老派の保守派が（1869年には長老派の進歩派も），1857年にはオランダ改革派がアメリカン・ボードを脱退して，それぞれ独自の海外伝道団体を作った。アメリカン・ボードは一時は他教派との合同事業であったが，1869年以降は超教派性を失い，会衆派独自の組織となった。なお，アメリカン・ボードは1960年に解散し，1961年からは合同教会海外宣教委員会（United Church Board for World Ministries）がアメリカン・ボードの活動を継承している。

アメリカにおけるキリスト教の宣教方法，さらにプロテスタント全般の宣教方法として，「福音伝道（Evangelization）」と「文明（Civilization）」はキーワードであるといわれてきた。異教徒に対してキリスト教を宣教する際，「福音伝道」と「文明」のどちらを優先するかという問題である。一方に，「福音伝道」によって福音を受け入れると，非西洋の人々には西洋文明を手に入れたいという欲求や刺激が生ずるという考え方がある。他方，非西洋社会に「文明」がもたらされると，それは次に福音の受容をもたらすという考え方があり，その結果，教育を通して「文明」が受け入れられることが強調される。しかしながら，一般的には，「福音伝道」と「文明」の両者は補足的であり，相補的であると考えられてきた（Beaver 1967: 13）。

本稿は，19世紀におけるアメリカン・ボードの宣教方針について検討するものである。この期間，アメリカン・ボードの宣教方針は，「福音伝道」と「文明化」の間で大きく揺れ動いた。19世紀のはじめ，宣教方針は「文明化」が強調されたが，その後は「福音伝道」へと変わり，19世紀の終わりにはまた「文明化」が強調されるようになった。以下で，なぜこのような変化が生じたかを考察したい。

1　アメリカ先住民に対する宣教活動

アメリカン・ボードはアメリカ国内の先住民に対しても宣教を行なった。1817年にチェロキー族で，1818年にはチョクトー族で宣教活動を開始した。ここで，アメリカ先住民に対する宣教について記すのは，彼らに対する宣教のあり方が，19世紀はじめのアメリカン・ボードの宣教方針の確立に関わっているからである。

17世紀のジョン・エリオットによる旧ニューイングランドに在住した先住民部族での宣教から，19世紀はじめのチェロキー族，チョクトー族の間での宣教まで，プロテスタント宣教師たちは，先住民を「キリスト教化」する前に「文明化」することを目標とし努力してきた（Harris 1999: 11）。そして，19世紀はじめのアメリカ先住民は，白人の文明と宗教を受け入れて国家に同化するか，どこか他の地で伝統的な慣習を続けるかの二者択一を迫られていたのである。土地を要求する白人たちの近くで住み続けるには，アメリカ文明への同化が必要であった（Bowden 1981: 164）。

このため，アメリカン・ボードによる先住民への宣教に当たっては，ミッションの活動が「文明化」を目的にすることがはっきりと述べられている。19世紀初期のアメリカン・ボードの指導者であったサミュエル・ウースターは，1816年の年次報告書で，アメリカ先住民に対する宣教の目的を，「文明化」，「キリスト教化」の順序で述べている。彼は，ミッションは「若い世代に普通の学校教育・役に立つ生活の技術・キリスト教を教え，全部族が英語を彼らの言語とし，彼らの習慣を文明化し，彼らの宗教をキリスト教とすることを目的とする」と述べている。言語を英語にするとしたのは，「インディ

アンは自分たちの言語より英語を読むのが容易に出来るからでもあるが，インディアンたちが彼らの隣人である白人たちの習慣ややり方により容易に同化できるからである。お互いの付き合いは容易となり，インディアンにとって利益は計り知れないから」だとする（Blaufuss 2000: 54; Hutchison 1987: 65）。

アメリカン・ボードの運営委員会委員のジェディダイア・モースなどは，「次第に増加しつつある白人との結婚が今後も続けば，それはまったく結構だ。彼らは文字通り我々と同じ血を持ち，国家にとけこみ，絶滅を免れる」と極端な同化主義を説いた（Hutchison 1987: 65）。ここでの結婚は白人の男性と先住民の女性との結婚を述べているのだが，多くの人々はモースの同化主義には同意しなかった。

個々の宣教地に宣教師たちは，農園・学校・教会を持つ村を作った。牧師だけでなく，医者・農夫・鍛冶屋・その他の職人も含めて「ミッションの家族」を作り，完全なキリスト教社会のモデルを作ったのである（Phillips 1969: 63）。白人たちは先住民をアメリカ文明に同化させ，定住農民とすれば，狩猟用地としていた土地を，力の行使なしに譲渡するだろうと考えた（Harris 1999: 21）。

この文明化の政策は，とりわけチェロキー族の間で，成功したかに見えた。かなりの数の人々は混血で，すでに文明社会の慣習や慣行を採用していた。そして，最初にキリスト教に改宗したのも，これら混血の人々であったからである。

1816年，アメリカン・ボードは，様々な地域の現地人の指導者となる人材を教育し，異教の地にキリスト教と文明を促進するような農業や技術の伝達を目的として，コネティカット州のコーンウォールに外国伝道学校（Foreign Mission School）を建てた。アメリカ先住民やハワイ人の生徒が英語で教育を受けた。外国伝道学校は，生徒を生まれた地域から引き離すことを意図していたわけではないが，堕落した社会の影響から切り離し，キリスト教社会に触れさせるということで利点があるとされた。明らかに外国伝道学校の目的は，ほかの社会を完全に「文明化」させるというアメリカン・ボードの初期の目的と，完全に一致していた（Harris 1999: 41）。チェロキー族の若者は外国伝道学校でも優れた成果を示し，アンドーヴァー神学校でも短期間学んだ。彼らは，アメリカ先住民社会でキリスト教徒となる生きた見本となり，文明化政策の正しさを証明するものでもあった（Phillips 1969: 66）。

ところが，1823年，外国伝道学校では，チェロキー族の生徒が学校の白人の給仕人の娘と結婚し，翌年にも同じような結婚があって，町は大騒ぎとなり社会問題となった。つまり，白人たちは，先住民を文明化・社会化して彼らを守るというほとんどの計画を支持したが，彼らを同等の人間として扱うことは考えていなかったのである（Hutchison 1987: 65）。

そして1826年，外国伝道学校は閉校する。後に詳しく述べるハワイの宣教団に外国伝道学校で学んだハワイの若者たちが同行したが，ハワイでの布教活動に貢献すること

がなかったので，宣教師を失望させた。このように閉校は，英語を通じて先住民を文明化する計画が事実上失敗したことと，宣教師が現地語で異教徒の若者を現地で教育することの便宜さを認識したことによる（Phillips 1969: 70）。生徒の多くが気候的・文化的に異なる場所での適応ができず，病気になったり，死亡したり，自分の社会に戻ったときに不適応を起こしたことも閉校の理由となった（Hutchison 1987: 67）。

アメリカン・ボードによる先住民の文明化政策が失敗したもうひとつの理由は，白人政府による先住民の強制移住政策である。

ジョージア州は1802年以来，チェロキー族に彼らの土地を放棄して白人に使わせるようにと急き立てていた。チェロキー族の指導者たちはいかなる譲歩にも反対したが，1829年にアンドリュー・ジャクソンが大統領に選出されたことは，彼らにとって致命的な打撃であった。新大統領は，先住民は居住する州の司法権に従うか，そうでなければミシシッピー川以西の土地に移るべきだとしたのである。ジャクソン大統領は1830年に移住法案を議会で通過させた。南東部のほとんどの先住民はその後まもなく降伏した。1830年にチョクトー族，1832年にチカソー族，クリーク族，セミノール族というように（Bowden 1981: 176）。

チェロキー族はすぐには移動せず，ジョージア州政府と対立を続ける中で，妥協策を模索した。先住民の側に立った宣教師は逮捕された。そして1835年には，州政府とこれ以上対立を続けても仕方がないとして，一部の人々は移住の条約に同意の署名をした。そして，1838年にはほとんどのチェロキー族の人々は故郷の地を離れて移住した（Bowden 1981: 177–178）。

この移住はチェロキー族だけでなく，移住先に住む平原インディアンにとっても悲劇となった。彼らはやって来たチェロキー族を歓迎することはなく，両者はしばしば対立した。チェロキー族は平和な生活を捨てて以前のような戦争の多い生活に戻り，彼らが学習した農耕生活から狩猟生活に戻っていった（Bowden 1981: 178）。

政府の強制移住政策を支持する者の中には，先住民を西部に移住させるのは，政府が取り得るもっとも人間的で慈悲に満ちた政策である，と主張する者もいた。なぜなら，先住民の文明化を成し遂げ，彼らが生き残ることを確実にするには，彼らに危害を加えたいと願う破廉恥な白人の手の届かないところへ彼らを移住させるしかない，と考えたからである。この議論は，強制移住法が議会で採決された時，議会を最終的に制した南部の政治家たちが進めた議論でもあった。地元ジョージアの役人たちには，近年にチェロキー族の土地から金が出たというような，先住民の州外追放を願う実際的な理由もあった。しかし世間の論争で移住賛成派が取った立場は，強制移住が完全に人道主義的な理由によるというものであった。つまり，父親のように慈愛に満ちた連邦政府の庇護を受け，西部の新しい土地に住めば，先住民はアメリカ市民になる心構えが徐々にできるであろう，というのである。自分たちの土地にとどまり，東部の土地を優勢な白人と

競い合えば，必ず先住民の数は激減する，というのが移住賛成派の言い分であった（マドックス　1998: 36–37）。

1823年の宣教師への指示を見ると，アメリカン・ボードの宣教に対する態度が変化しはじめたのがわかる。「福音を受け入れる前に文明化していなければならないという一般的に信じられている誤りを支持してはならない」。しかし，勤勉や秩序や家庭的道徳の習慣を身につけるための学校を開設することは指示されていた。財政的な問題もあり，1824年には，アメリカン・ボードは，世俗的な労働を大幅に削減し，学校の規模を縮小し，説教により一層の努力を集中するようになる（Harris 1999: 11, 22）。

先住民の移動と，白人が居住地を求めて押し寄せてくる圧力により，宣教師の活動は困難となった。文明化政策からの後退で，個人の改宗への関心が大きくなった。1832年の年次報告書でアメリカン・ボードの運営委員会は，チェロキー族の間で活動する宣教師に「インディアンたちに悪徳と罪を，そしてキリストの偉大なあがないについて関心を持つ必要を確信させよ」と述べたし，英語を強調する度合も低くなった。教会に関係しない世俗的生活を確立させようという計画も中止された（Hutchison 1987: 67）。「文明化」ではなく，「福音伝道に基づくキリスト教化」の方針が明確になってくる。アメリカン・ボードの本部は，アメリカ先住民への宣教には多くの資金を投入したが，世界の各地に送ったどのミッションよりも成功していないと考えていた。だから，アメリカン・ボードの1832年の年次報告書は，「はるかに多くの人口を持ち，もっと近づきやすく，生活手段がはるかに安くてすむほかの国々からの要求を考えると，……委員会はアメリカ先住民に対する活動をより広く行なうことは，金のかからない方法が考えられない限り，正当なものとは思われない」と記している（Hutchison 1987: 69）。

それから数年のうちに，いくつかのミッションは中止された（Hutchison 1987: 69）。1859年にチョクトー族のミッションは長老派に移管された。チェロキー族のミッションについては，チェロキー族はキリスト教徒になったという名目で，1860年に廃止された。

2　ハワイにおける宣教活動

アメリカン・ボードのハワイへの関心は，アメリカの船でニューイングランドへやって来たヘンリー・オプカハイア（アメリカではオボーキアと呼ばれた）というハワイ人の青年によって生じた。オプカハイアは，後にアメリカン・ボードを設立することになる若い大学生のグループと出会ったのである。この出会いは，前述したコネティカット州コーンウォールに外国伝道学校が作られた一因ともなった。故国ハワイでの宣教を熱望していたオプカハイアは優秀な生徒であったが，1818年に病死し，アメリカン・ボードを失望させた。彼がハワイの人々を改宗させることが期待されていたからだ。

アメリカン・ボードのハワイ宣教団は，1819年10月にボストンを出発しハワイへ向かった。この宣教団は7組の夫妻と5人の子供からなっていた。すなわち，宣教師ハイラム・ビンガムとその妻，同じく宣教師のエイサ・サーストンとその妻，医者のトマス・ホルマンとその妻，印刷工で教師のイライシャ・ルーミスとその妻，説教師のサミュエル・ホイットニーとその妻，教師のサミュエル・ラグルズとその妻，農夫のダニエル・チェンバレンとその妻子たちである。宣教団の助手として同行したのは，外国伝道学校で学んだトマス・ホプ，ウィリアム・テヌイ，ジョン・ホヌリの3人のハワイ人であった。

アメリカン・ボードがハワイへの最初の宣教団へ与えた指示は以下のようなものであった。「これらの島々が実り豊かな畑と快適に暮らせる住居と学校や教会で覆われることを目指すこと。すべての人々をキリスト教文明という高められた状態に引き上げることを目指すこと」。そして，「何よりも，偶像崇拝と迷信と悪徳から，力強く救済する神へと人々を改宗させること」が指示されていた（Garrett 1982: 35）。宣教団はハワイ人を「文明化」させることと「改宗」させることとを同時に行なうように命じられたのである。

1828年にハワイに来た宣教師のピーター・ジョンソン・ギュリックを父に持つジョン・トマス・ギュリックも，父たちに与えられた使命を以下のように記している。

> われわれの両親の使命は，単にこの島の王国の人々に来世のための準備を説くことだけではなかった。この世での彼らの生活状態を改善しながら，どのようにしてこの大きな目的を達成するかをも教えねばならなかった。樹皮をたたいて作った腰布しか身につけていない人々に，両親は衣服をまとうように説いたが，そのためには，彼らに針と糸の使い方を教えてやらねばならなかった。また家族全員が草ぶき屋根の下のひと部屋で暮らすのをやめて，ノコギリとカンナを使って部屋がいくつもある家を建て，男の子と女の子が別々に寝るようにと教えた。さらに印刷機を使って綴字法の本や「聖書」だけでなく，歴史や地理などいろいろな書物を作ることも教えた。そして，私の父がホノルルに上陸してから10年目にして，一番最初の宣教師の上陸からも18年経たないうちに，すばらしい成果があらわれた。島の人の大部分が読むことをおぼえたのである（ギュリック 1988: 11）。

アメリカン・ボードは，ハワイへ派遣される宣教師は結婚していなければならないと要求した。そこで，宣教師たちは出発前に急いで結婚相手を探した。既婚者を派遣するということは，18世紀の終わりにタヒチに派遣されたイギリス人の独身宣教師がタヒチの娘と関係を持ったことを考慮して，そうしたことが起きないようにする予防措置という側面もあった。しかし，既婚者を派遣するのは，何よりも，アメリカン・ボードの「文明化」という使命と関係していた。宣教師夫妻がキリスト教徒の家族生活のモデルとなることで，「文明化」の役割を果たすものと考えられたのである。

1820年3月に最初の宣教団はハワイ島のカイルアに到着した。彼らが到着した時期

は，宣教団にとって，絶好のタイミングであった。19世紀初頭にハワイ諸島を統一したカメハメハ大王は1819年５月に死亡し，息子のリホリホ（カメハメハ２世）が王位を継承していた。カメハメハ大王の死後，高位の首長たちによって伝統宗教のタブー（ハワイ語ではカプ）のシステムは停止されていた。これまではありえなかった男女が一緒に食事をする光景が見られ，祭祀場が壊されたり，神像が破壊されたりしていた。

カプの廃止は政治的危機に対する反応であると人類学者のダベンポートは述べている。西洋人との接触により，急速に政治の及ぶ範囲が拡大し，交易が増大し，伝統的な宗教に対する懐疑が生じ，人口が減少した。こうした危機において，最高首長である王は，伝統的宗教の力を弱くすることで，自己の政治力を強めることを試みたのだと言う（Davenport 1969: 18）。

カメハメハ大王の代弁者であり首相の役割を務めたカラニモクとカメハメハ大王の妻であったカアフマヌは，宣教団を歓迎した。彼らは，一時停止されているカプの制度に代わる活気ある精神的な代理となるものを探していたのであった。1822年にロンドン宣教会（London Missionary Society）の宣教師でタヒチにいたウィリアム・エリス夫妻がハワイを訪れたが，エリスはハワイの状況を「人々は自分たちの偶像を投げ捨てた。しかし完全にではない。彼らはいかなる宗教も持っていないと言ってよい。彼らが放棄したものよりもよい宗教を本当に待っている」と述べている（Garrett 1982: 42）。

宣教師たちには，アメリカン・ボードの運営委員会からの指示は，ニューイングランドの文化をできるだけたくさんハワイへ移すことを命じているように思われたので，彼らはハワイ人の生活を変容させようと努めた。しかし，アメリカの農業方法を導入しようとした試みは失敗した。宣教団の第一陣としてハワイに来た農夫のチェンバレンは，子供の教育の問題もあって，1823年に辞任して帰国した。彼の後任が送られることはなかった。アメリカン・ボードは，1836年にはハワイの女性に紡績と織物を教えるために女性技術員を派遣したが，成果はあがらなかった。それから２年後に，宣教師たちがハワイ人に技術を教えるために，農夫や職人の派遣を要請したが，アメリカン・ボードはこれを拒否している（Phillips 1969: 98）。

1823年，カメハメハ２世は妻とイギリス訪問の旅に出た。彼は浪費癖があり，カアフマヌやアメリカ人宣教師から遠ざかっていた。アメリカと異なり国王を戴くイギリスの事情を知ることがハワイに役立つと思われた。ところが国王夫妻はロンドンではしかにかかって二人とも死亡した。国王の死で，弟のカウイケアオウリ（カメハメハ３世）が即位したが，新国王が年少なのでカアフマヌが摂政となった。

1825年にはカアフマヌやカラニモクを含む数人の有力な首長をはじめとして，何百人というハワイ人が洗礼を受け教会に加わった（Phillips 1969: 96）。また，同年に首長たちは国王にキリスト教の教育を受けさせることに合意した。しかし，国王は宣教師に尊敬を払ったけれども，敬虔な信者にはならなかった（Garrett 1982: 46）。

ハワイ人の改宗を進めるため，アメリカン・ボードは学校教育に力を入れた。さらに高度の教育のための教師を養成することを目的としてラハイナルナ校を設けた。

1832年にルーファス・アンダーソンがアメリカン・ボードの海外通信担当幹事となる。アンダーソンは19世紀中期のアメリカン・ボードの宣教活動に強い影響を与えた人で，これまでミッションの目的として福音伝道と文明化を一緒に考えてきたことに異を唱え，福音を伝えることのみを目的とすべきだと強調した。そして現地に作られた教会は，現地人の手で運営され，経済的にも自立し，さらには自ら宣教するという（self-governing, self-supporting, self-propagating）３つのselfの性格を持っていなければならないとした。

アンダーソンに関しては後で詳しく述べるが，ここでは，1832年のアメリカン・ボードの年次報告が，アンダーソンの主張を受けて，福音伝道と文明の関係についてこれまでと異なる見解を示していることに注目したい。「白人の文明の技術を教示するために農夫や職工を派遣することは，高くつき，問題が多く，特に有効でもないことは明白である」。つまり，これまでの「文明化」政策を否定しているわけである。1825年の有力な首長はじめ多くの人が洗礼を受けたという報告以降の宣教師たちの報告をもとに，1833年のアメリカン・ボードの機関誌『ミッショナリー・ヘラルド』は，ハワイ人はキリスト教徒となったと述べ，「キリスト教が，文明に先立ち，文明への道を導いている。12年前には人々は異教という闇に厚くつつまれていた。正義なる太陽が昇った。……そして朝が来た，明るい幸せな朝が」と述べ，「福音」が優先したことを強調しながら，楽観的過ぎる記述をしている（Phillips 1969: 96）。そして，アメリカン・ボードの1834年の年次報告書は宣教の目的を明白に記す。「生の声で福音を説教することが，我々宣教師の最大の仕事である」（Blaufuss 2000: 55）。

1837年にハワイ島で多数の人々が集団で悔い改め，改宗する信仰復興運動が生じた。２週間にわたる祈祷集会において，人々は泣いたり，体をゆすったり，喜びの声やうなり声をあげた。子供の頃に信じていた異教を捨てて，新たに生まれ変って聖霊が体に満ち溢れるのを感じた人々は，恍惚として開放感に浸った（Garrett 1982: 56）。

この信仰復興運動は1840年まで続き，オアフ島など他の島にも広がった。この期間に１万人以上の人々が洗礼を受けて聖餐に加わり，1840年までにハワイのプロテスタント教会には２万人以上の教会員がいた。アメリカ本土では「ハワイは１世代でキリスト教国家になった」と言われた（Loomis 1970: 19–20）。信徒の数に関して，ルーファス・アンダーソンは1839年から1841年までの間に２万2297人が教会員になったという（Beaver 1967: 54）。ハッチソンは，「1830年代の信仰復興運動のうねりの後で，10万人の人口の中で，１万8000人が陪餐会員だった」という（Hutchison 1987: 70）。以上の数字から，おおよそ全体のほぼ５分の１の人々がキリスト教徒になったと推定される。このように，信仰復興運動で信徒が急速に増えたのであるが，新しい教会員のほと

んどはハワイ島のヒロとワイメアの地区の人々であった。これらの伝道所の宣教師であったタイタス・コーンとディビッド・ライマンとロレンツォ・ライアンズが熱意を持って改宗を勧めたのは確かであるが，彼らは人々の教会への加入については寛大なところがあったのではないかといわれている（Harris 1999: 67）。

ハワイは布教の見込みが高い所なので，アメリカン・ボードは多くの宣教師を派遣した。1852年までに，13回にわたり総計150人以上の人々がハワイに送られた。

1830年代の終わりの信仰復興運動の後，1843年まで教会員の数は増加し，そこで固定した。1846年になるとルーファス・アンダーソンは，アメリカン・ボードによる宣教活動の段階的廃止を主張し，教会をハワイ人牧師に任せるようにと述べた（Harris 1999: 114）。アンダーソンは宣教師たちがハワイ人を牧師に任命するのに慎重になりすぎていると考え，早く任命するようにと催促した。アンダーソンは，ハワイ人の牧師の基準を下げるように言ったり，早くハワイ人牧師を誕生させるために短期間の教育プログラムを提案することまでしている。宣教師たちはアンダーソンの意見に納得せず，なかなかハワイ人を牧師に任命しなかった（Harris 1999: 116）。

アンダーソンは，1846年に書いたハワイのミッションへの手紙で，ハワイの政府も教会もハワイ人によって運営されるべきだと述べ，以下のように説明している。

> ハワイ人は政府と教会の両方で，すべての主要な地位から締め出される恐れがある。外国人が国王の周辺や政府のすべての役職に就いている。外国人は，自分たちが現地人よりもその役職を上手に行なうことが出来るが，現地人には出来ないと思っているからである。……ハワイ人が，外国の裁判所や政府の中で仕事を行なわなければならないのなら，外国人のように仕事をこなすことは出来ない。しかし，その制度を彼らの国のものとして続けていくのが不可欠であるのなら，それらの役職は現地人によって行なわれなければならない。まったく彼らがやらないよりも，不完全であっても彼らにやらせたほうがよい。
>
> 現地教会の役職や任務についても同じように考えざるをえない。私はこの問題に皆さんが関心を持ってもらいたいと思う。もし教会の役職が外国人によって行なわれれば，政府の役職も外国人によって占め続けられるだろうと思うからである（Phillips 1969: 125–126）。

1848年になると，外国人顧問に勧告された国王が土地改革を行なった。封建的土地所有制度であったものを，個人的な土地所有形態に改めたのである。元来首長制のもとでの土地所有は，王または最高位首長が全体の土地を所有し，それを配下の首長に分配する封建的なものであった。実際に土地を使用するのは平民であるが，平民は小作人として貢納を行ない，土地を管理する首長がそれを受け取って王に納めるというものであった。この改革では，まず王の土地と首長の土地に分け，王の土地はさらに王家の土地と国有地に分けられた。さらに実際の使用に基づき平民も土地の分配を受けることが可能となった。王や王国に仕えたということで，白人にも土地が与えられた。土地改革で土地の売買が可能となった結果，白人はそれを購入したり，実際の使用に基づき権利

を主張したりしたので，ハワイ王国が滅亡する19世紀の終わりごろには，ハワイの土地の多くが外国人の手に渡ることになった。

1841年に宣教師の子供たちの学校が設置されたけれども，30年代に大勢やってきた宣教師たちが子供の教育のために帰国を希望するようになった。ハワイ人の信徒はアメリカ人宣教師の指導の下にいたから，多くの宣教師が帰国すれば，プロテスタント教会は崩壊し，信徒はカトリックに移ってしまうと考えられた。

この状況に対して，アメリカン・ボードは1848年に以下のことを決定したと，アンダーソンは記す。「運営委員会がすべきことは，多大な出費を招くことなく，これらの家族をハワイに留める方法を考えることであった。と同時に，ミッションは成功したので，早い時期にミッションの終結を準備することであった」（Anderson 1870: 242）。宣教師たちは，アメリカン・ボードとの関係を絶ち，帰化してハワイ国民となり，現在使用しているアメリカン・ボードの家屋や土地を購入する権利が認められた（Phillips 1969: 127）。1851年までに22人の宣教師がハワイ国籍となった。

ハワイ人最初の牧師としてジェームス・ケケラが任命されたのは，1849年である。その後，ハワイ人牧師は増加し，1870年には39人のハワイ人の牧師がおり，白人牧師は８人であった（Harris 1999: 157）。

1852年にはアメリカン・ボードの白人宣教師とともにハワイ人の助手がミクロネシアでの宣教を開始し（中山　1997），1853年にはハワイ人だけでマルケサス諸島での宣教を開始した。ハワイの教会は他の場所での宣教（self-propagation）を行なうようになった。

1854年にはアメリカン・ボードのハワイ・ミッションの役割を引き継ぐためにハワイ福音協会（Hawaiian Evangelical Association）が創設された。1863年，アンダーソンは最終的に権限をハワイの教会に移し，またハワイの教会が経済的に自立する手はずを監督するため，ハワイを訪れた。アメリカはインフレと南北戦争（1861–65）のさなかであった。アメリカ本土での献金は著しく減少したので，ハワイの教会の独立と自立は緊急に必要だったのである（Garrett 1982: 58–59）。ハワイの教会の自給（self-support）に関しては，教会員からの献金を増やすよりも，ミッションの行なっていた学校の経営をハワイ政府に移すことにより支出を抑制することで増大させた。こうして，まがりなりにもハワイの教会は，アンダーソンが主張する３つのselfの性格を備えたとして，1863年にアメリカン・ボードから独立した。ハワイの教会が独立するまでの経緯を見ると，アンダーソンは自己の宣教思想を実現させるために，相当強引に事を進めた感があるのを否めない。

既に述べたようにアメリカン・ボードのハワイでの宣教では，最初は「福音伝道」と「文明化」の両方を目的としていた。しかし，「文明化」の失敗が明らかになって，「福音伝道」だけを目標とするようになった。アメリカ本土で生じたような信仰復興運動が

ハワイでも生じて，キリスト教国家のようになったのも，「福音伝道」だけを目標としたことの正しさを裏付けるものと考えられた。1865年にアンダーソンは，「歴史の中で最も明白な事実のひとつは，ハワイ諸島では福音が文明に先行したことである。少なくとも，文明の進歩は福音の進歩より遅かった」と書き，「福音」が「文明」より先だったことを強調している（Harris 1999: 158）。ハワイは独立国家であったが，ハワイ人の減少と白人の卓越の傾向は止められなかった。アメリカン・ボードとしては，異教徒の地にキリスト教国家を誕生させたということで，満足していた。1870年にアンダーソンは，「（ハワイ）国家はおそらく消滅するだろう。しかし，福音の成功ということについて事実は残るだろう」と述べている（Phillips 1969: 131）。アンダーソンは自己の宣教思想が実現したものとして，ハワイの事例を強調している。

「福音」優先であるとしても，宣教師は明らかに宗教や健全な道徳に反している人々の慣習を止めさせて，「文明化」せざるをえないと考えていた。例えば，飲酒や性道徳である。寄港する西洋の船はハワイに酒をもたらしたし，船員はハワイの女性を求めた。宣教師の影響の下で王や首長がカトリック宣教師の上陸を禁止したこともある。ビンガムら宣教師は宗教的独占を守るために影響力を行使しているだけだった。ハワイは独立国家であったから，王や首長たちが，精神的なことだけでなく，政治的・世俗的な問題についても宣教師に忠告を求めたこともある。こうした時には，宣教師たちは首長たちの背後に隠れ，政策はあくまで首長たちが行なったことであると言い訳したが，船員や商人や西洋の領事や軍人が宣教師を非難し，対立が生じた。

アメリカン・ボードは，宣教師が政治的・世俗的な事柄には干渉しないよう繰り返し注意している。ハワイに最初に派遣された宣教師のハイラム・ビンガムは，世俗的なことに深く関与したとして，1840年に彼が一時帰国した時にはハワイに戻ることを許されなかった。ハワイの宣教師は，彼らが道徳的・社会的な変革を行なおうとすれば干渉していると非難されるだろうし，それをしなければ無関心だと笑われるという，苦しい立場に追い込まれた（Hutchison 1987: 77）。

アンダーソンの文明と福音の分離という論理は，現地の宣教師と白人の対立とそこに発するアメリカでの反宣教師キャンペーンに対抗するために，海外伝道防衛理論として構想されたという側面がある。アンダーソンはあえてミッションが当然のこととしていた「キリスト教化」＝「アメリカ化」の前提に反省を迫り，海外伝道の目的は「アメリカ化」ではなく，「キリスト教化」なのだ，両者は分離可能なのだと論を張ることで，海外伝道に対する信頼を確保しようとしたのだと見ることができる（Hutchison 1987: 77; 小檜山 1997: 115–116）。

3　ルーファス・アンダーソンの宣教思想

ルーファス・アンダーソン（1796–1880）は，会衆派の牧師の息子として生まれた。彼は宣教師を志願していたが，彼の両親と二人の兄弟が結核で死亡していたので，健康上の理由で却下された。その代わりに彼はアンドーヴァー神学校を出ると，1823年からアメリカン・ボードの本部で働くようになった。そして，1832年には海外通信担当の幹事に就任し，1866年までこの職にあった。幹事辞任後も1875年まで運営委員会委員を務め，その後名誉会員となった。このように，彼は19世紀の中期の長期間にわたって，アメリカン・ボードの海外伝道の責任あるポストを占め，彼の海外伝道に関する考え方は大きな影響力を持ったのである。

19世紀初期のミッションの目的は，福音を伝える前に「文明化」が必要である，あるいは，キリスト教の宣教と文明化とは同時進行させていくべきである，というものであった。これに対してアンダーソンは異を唱え，文明とは関係なく「福音」だけを伝えればよい，文明は後からついてくると述べた。彼によれば，文明はミッションの副産物であって，目的ではないのである。

アンダーソンは，1845年の説教で以下のように述べている。福音がニューイングランドにもたらした文明は，宗教的観点からして，世界中で最高かつ最善のものである。そこで，我々は，キリスト教をニューイングランドの文明の「教育，勤勉，市民的自由，家族制度，社会秩序，尊敬される生活の手段，秩序だった共同体」と一体のものとみなす。だから，宣教により福音を伝えることは，異教の部族や国家に，我々が享受しているような高度に改善された社会状況を作ることであると考える。この知的・社会的変容を我々は短期間でやりとげようとする。そして，さらに，野蛮人であっても改宗したその世代の人々が，道徳や行儀作法，政治経済，社会組織，権利，正義，平等といった我々の基本的観念を手に入れることを期待する。こうした考えであれば，ミッションは，人々に神を受け入れさせることと，様々な直接的手段により改宗者のいる社会システムの構造を再組織化するという，二つの目的を行なわなければならなくなる。そうであれば，ミッションの目的は複雑で厄介で経費のかかるものとなってしまう。だから，異教徒への宣教では目的は一つに絞るべきで，それは霊的なものに限るべきである。すなわち，宣教師は「文明」ではなく，「福音」だけを伝えることを使命とすべきだというのである（Beaver 1967 : 73–77）。

1856年にアメリカン・ボードは，アンダーソンの下で，以下のような公式の宣教政策を採択している。「ミッションの目的は以下の 4 段階からなるとする。(1) 迷える人を改宗させ，(2) 彼らを教会へと組織し，(3) それらの教会を有能な現地人牧師に担当させ，(4) 独立させ，そして（ほとんどの場合）自分でも宣教を行なう段階にまで導く」（Beaver 1967 : 24）。つまり，外国からやって来た宣教師はそこに留まることを目的と

しない。宣教師は，なるべく早く現地人の聖職者を養成して彼らに教会を任せ，新たな布教地へと移るべきだというのである。

そして，1869年に著した『外国伝道（*Foreign Missions*）』で，アンダーソンは教会に関しては「３つのself」政策を提唱し，現地教会原理を提出する。「３つのself」とは，(1) 自治（self-government），(2) 自給（self-support），(3) 自ら宣教すること（self-propagation）である。教会は現地人牧師が司牧して，教会は自治を行なうべきである。そして，現地人牧師の俸給は出来る限り早く自分たちでまかなうようにする。外部からの援助に頼らず，自分たちで経済的に自立すべきである。そしてさらに，教会は他の地域への宣教を自ら行なうべきであるというものである（Beaver 1967: 98–99）。

宣教師は現地人による自治はまだ早すぎると言いがちである。アンダーソンは，責任を教える最良の方法は責任を与えることだと言い，現地人の働き手を信頼するように宣教師を励ました（Harris 1999: 113–114）。

ルーファス・アンダーソンの宣教思想は，1845年に行なった説教で述べられているように，使徒パウロの宣教を参考にして構築されている。使徒の時代，世界でもっとも文明化した地域に異教徒がおり，ここで宣教が行なわれた。だから，その時には「文明化」という問題は存在しなかった。現在，すべての文明化した世界は少なくとも名目的にキリスト教化している。だから，現代のミッションは，まったく文明化していないか，部分的に文明化している地域で行なわれる（Beaver 1967: 80）。そこで，「文明化」ということが問題になるのだが，先述のとおりアンダーソンは「文明化」を目的とすることなく「福音」のみを強調する。福音によって「キリスト教化」した社会は変化を示すが，直ちに西洋文明になるわけではない。そうした社会の人々が西洋のキリスト教徒のような純粋な敬虔さを持っていたとしても，新たに出来た教会には不規則さ・不健全さ・無秩序や，不道徳性すらも存在することがある（Beaver 1967: 32）。西洋が文明化したことじたい時間がかかったことであり，キリスト教化した社会はいずれニューイングランドのような文明社会になるかもしれないが，早急な「文明化」を求めることはミッションの目的ではない，とアンダーソンは1851年に書いている（Phillips 1969: 253）。アンダーソンのミッションの計画は２つの確信に基づいていた。１つはキリスト教という宗教と文明が勝利するという一般的な考えであり，もう１つは，聖霊の御業に対する絶対的な信頼であった。福音は一度植えつけられると，いずれは，本当の宗教，健全な学識，完全なキリスト教文明を促進すると考えていた（Hutchison 1987: 79–80）。そして，アンダーソンは，1869年に刊行した著書の中で，「野蛮人を文明化する，簡単で，金のかからぬ，より効果的な手段は福音のみである」と主張した（Hutchison 1987: 82）。1856年のアメリカン・ボードの年次総会では，文明化するまでは異教徒をキリスト教徒にすることは出来ないという古い理論には全員が反対したのである（Harris 1999: 150）。

アンダーソンは1869年に，自足的で効果的な現地教会（native church）が発展するため原住民牧師を持つ必要があるということは，最近言われだしたことであると述べている（Beaver 1967: 98）。そして彼は1841年に，使徒の時代には原住民の牧師が用いられたと言っている（Beaver 1967: 103）。アンダーソンはこの問題でも使徒の時代の例をもとに自分の宣教思想を述べていることがわかる。

アンダーソンは，「キリスト教化」した社会が直ちに「文明化」しないのと同様に，原住民牧師にあまり多くのことを期待してはいけないと，1841年の年次報告書で述べている。「異教の深みから出現して，私達の国と対等な牧師の一団が供給されるには，何世代も必要とするに違いない」（Beaver 1967: 104–105）。

現地人聖職者を用いる理由を，アンダーソンは1841年の年次報告書では以下のように述べる。現在のほとんどのミッションには，「距離」，「経費」，「気候」という３つの大きな障害がある。イギリスはインドを征服する際に，同じ困難を抱えていた。しかし，イギリスは現地人の軍隊を用いることで，インドという大きな人口の国を服従させている。我々も霊的な戦闘において現地人の軍隊を使う必要がある。つまり，現地人の福音伝道者を使うのだ。この方法がいかに経済的な節約になるかを，アンダーソンはとうとうと述べる。例えば，インドの５人の現地人を10年間教育する費用は１組の宣教師夫妻をインドに派遣するための装備代と船賃よりも安いというように（Beaver 1967: 105）。

アンダーソンは1869年に刊行された本で，自給（self-support）の主たる障害は会衆がまかなえる以上の高い俸給を現地人牧師が期待することにある，と述べている。現地人牧師は自分と同じ民族の貧しい群集の生活よりも外国人宣教師のような生活を望むのである。それ故に，アンダーソンは，宣教師たちに彼ら宣教師と現地人助手の間に明確な階層的区分を維持することを要求し，現地人たちが自分たちを外国人宣教師と同等と見做すような危険を避けるようにと言う（Harris 1999: 114）。

アンダーソンは，1838年に書いた論文で，教育の問題に関しても独自の見解を述べている。使徒たちが宣教した地域は最も文明化した地域であったので，宣教の仕事に教育は入っていなかった。しかし，「我々の宣教地は異教の地であるだけでなく，もっとも非文明的な所である。我々が宣教の対象としているのは教育を受けていない人々で，かなりの程度未開人で野蛮人でもある」（Beaver 1967: 166）。さらに，アンダーソンは1861年刊行の『アメリカン・ボードの50年史（*Memorial Volume of the First Fifty Years of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*）』に以下のように書いている。福音を口頭で伝えるだけでなく，聖書を人々に与えることにも努めねばならぬ。読み方を知らねば聖書が読めないから，学校をつくる必要がある。この学校は最初はミッションによって維持されるべきだが，そんなに長くならないうちに，生徒の両親たちによって維持されるべきである（Beaver 1967: 90, 99–100）。

アンダーソンは1855年にインドを視察旅行で訪れた時に，そこでの教育に関する方針を変えさせた。金のかかる寄宿制の英語で教育する制度を廃止し，現地人の説教師や助手を養成するための現地語による教育の制度へと変更させたのである（Harris 1999: 80）。英語で教育を受けた多くの生徒たちは，伝道の仕事には就かず，商業に携わったり役人になったりして高給を得た。だから，英語の知識を最も獲得した者が最も福音を受け入れないという結果に終わることが多かった（Hutchison 1987: 83）。アンダーソンは教育に使われた金が現地人の聖職者の養成に直接貢献しない場合は，まったくの損失と考えた（Harris 1999: 8）。

アンダーソンの宣教思想は，福音の伝道によって個々人を改宗させ，作られた教会は３つのselfの性格を持つべきであるというものであった。アンダーソンがそのような構想を抱くようになった理由を考察しよう。

まず第１に，19世紀初頭に行なわれていた「文明化」政策が失敗したことが挙げられる。ある社会を本当に「文明化」することは，達成することがなかなか難しい，時間も経費もかかる大変な仕事であることがわかったことである。

第２に，ハワイの事例が示すように，性道徳や飲酒などを改めさせようとするちょっとした「文明化」も他の白人と対立をもたらし，国際問題にもなった。「文明化」ではなく，「福音」だけという方針であれば，こうした対立は避けやすかった

第３に，経済の問題がある。アンダーソンは，1859年の年次総会で「これまでの40年間で30年は会計で赤字であった。それまでの負債をずっと引きずってきたからである」と述べているし，その後のアメリカン・ボードの経済的運営も大変だったのである（Strong 1910: 312, 317）。アンダーソンの宣教思想は，一連の政治的・経済的危機の中で経験によって形作られていった。彼は，説教という方法が，他の手段――とくに印刷機――よりも安価であり優先されるべきだと考えた。特に1837年の不況は，急速に増大しているミッションの教会が自治（self-support），自給（self-government），自ら宣教すること（self-propagation）を現実に行なう必要を増大させた（Blaufuss 2000: 27）。３つのselfの政策も，教育で英語が不必要ということも経済的な節約に基づいている。これまでの記述からも，アンダーソンがいかに頻繁に経費について言及しているかが分かる。アンダーソンは，少ない予算でいかに効率よく宣教事業を行なうか，このことに非常に強い関心を抱いたように見える。そして，もっぱら「福音伝道」のみに専念すべしと言う方針を使徒パウロの宣教に基づいているとすることで，正当性を主張しているのだと思われる。

4　19世紀末期の宣教思想

アメリカン・ボードによるインド南部のマドゥラ・ミッションの歴史を調べたブラウ

ファスは，1830年から1916年までのミッションの目的は，２つの時期に分けられるという。最初の時期は1830年から1875年までの期間で「個人と個人の選択」を強調した時期であり，1875年から1916年までの期間は「社会全体」をより強調するようになる時期だとする（Blaufuss 2000: 18）。すなわち前期は，アンダーソンの主張が実践されていた時期で，個人の改宗に主眼が置かれた。後期は以前よりも人々の社会的状況へ関心を向けるようになり，個人のみを強調することから，個人間の組織的なつながりへと焦点が移った（Blaufuss 2000: 37）。

パスマライ・セミナリーという学校を例に取り上げて，この変化を説明すると，1855年にインドを視察したアンダーソンは，この学校を布教のための働き手を養成することを目的とさせ，英語を廃して現地語で授業が行なわれるようにさせた。このことは前にも述べた。ところがこの学校は1870年になると，教会の指導者になるかどうかはわからない学生たちに一般教育を授けるものと改められた（Blaufuss 2000: 107–111）。前期には人々を改宗させることが目的で，学校や実業教育や医療活動は補助的な活動と見なされていたが，後期になるとそれらも重要な目的となったのである（Blaufuss 2000: 75）。

マドゥラ・ミッションと同様，他のアメリカン・ボードのミッションの目的も，1870年代までにキリスト教の影響を社会に広げることへと変化した。1869年に始まった日本ミッションでも，個人と同様に社会も対象として，キリスト教が日本社会の変革に果たす役割が強調された（Blaufuss 2000: 219, 224）。

北中国ミッションにおける高等教育機関の創設を巡る問題を考察した柴野（2001）も，ミッションの教育活動の性格が19世紀末になるとそれまでとは変わってくると述べている。それ以前，ルーファス・アンダーソン主義を提唱していたアメリカン・ボードが「教育活動」として許容していたのは，聖書を読むために必要とされる程度の読み書きのみであった。しかし19世紀末期には，伝道活動は，社会の救済をも視野に入れたものであるとの使命を持ち，その使命のゆえに，聖書を読む以上のレベルを持つ教育活動を，福音と並んで不可欠なものと認識するようになった。その結果，1889年にキリスト教の影響下にあるが，西洋の非宗教的知識も教授する北中国カレッジが創設された。直接にはキリスト教に関係しない西洋の知識，すなわち「文明」の教育も，アメリカン・ボードは政策として認めるようになったのである。

そして，19世紀から20世紀への世紀転換期に活躍した会衆派教会の牧師にジョサイア・ストロング（1847–1916）という人がいる。森（1994, 1996: 9–32）によれば，ストロングは世紀転換期にアメリカ・キリスト教界の中心的運動となった「社会的福音運動（ソーシャル・ゴスペル）」のもっとも初期からのリーダーであり組織家であった。彼は1886年から1898年までの12年間，プロテスタントの諸教派の連合体である「アメリカ福音主義連盟（American Evangelical Alliance for the United States）」の総幹事

を務めている。彼の著書である『我が祖国』(1885) はベストセラーとなり，多くの人々の支持を得た。

当時，工業化と都市化の進むアメリカで，工業化に必要な労働力として大量にやってきた新移民と呼ばれる人々（ワスプWASPとは異なる社会的･宗教的背景を持つ移民で，例えば，アイルランドやイタリヤからのカトリック教徒や，ロシアや東欧からのユダヤ教徒やギリシャ正教徒，さらには日本や中国などのアジア系移民）の間で住居や労働問題といった都市問題が拡大しつつあった。これらの問題の解決に取り組んだのが社会的福音運動である。

このように，アメリカン・ボードのミッションの目的は，19世紀の終わり頃になると，個人から社会へと対象が広がる宣教活動へと変化した。以前は宣教活動において補助的な役割しか与えられていなかった学校や実業教育や医療活動が，重要な役割を帯びるようになった。

この変化の理由は19世紀の終わり頃に強い影響力を持った社会的福音運動と自由主義神学の理論によるところが大きい。社会的福音運動についてはすでに記したが，自由主義神学も集団や社会を重視する。自由主義神学のホレース・ブッシュネルは，個人を社会や家族の一部と見做すことで，個人よりも集団へと関心を移した。彼は，人々がキリスト教徒になる手段に関して，信仰復興運動によって急に信徒となるよりも，キリスト教的な育て方の中で信徒となることが重要だという考えを示した（Blaufuss 2000: 36–37)。社会的福音主義と自由主義神学の理論家は，これまでの理論よりも社会的状況に関心をよせたのである。

宣教の対象が個人から集団へと拡大し，学校教育の重要性が認められると，宣教団のメンバーにも変化が見られた。婦人宣教師の役割が大きく変わり，その数も増大したのである。

ルーファス・アンダーソンにとって，福音の伝道・現地人牧師の養成・現地のキリスト教徒による教会の設立が海外伝道の方法であり目的であったが，これらはすべて按手礼を持つ男性宣教師のみが最終的に権威を持ちうる仕事であった。これに対して按手礼のない婦人宣教師が最も力を発揮したのが一般の学校――特に女学校――の設立と運営においてであった。アンダーソンのように，学校などという文明の伝播を担う色彩が強いものは最小限にとどめ，もし運営するとしても現地語で教育を行なうという方針を貫くなら，婦人宣教師への需要が高まることはないはずである。事実，アンダーソンは断固として独身女性の派遣に反対する保守派として知られていた（小檜山 1992: 22)。この時期における女性の主たる役割は，宣教師の妻として家庭を守り，そのキリスト教徒の家庭生活をモデルとして人々に示すことであった。19世紀の終わり，宣教の対象が個人から社会全般へと拡大し学校教育が強調されるようになると，ミッションにおける女性の役割が大きく増大した。学校の教師として独身の婦人宣教師が求められるよう

になり，その数は増大していった。1868年には会衆派の女性によってアメリカン・ボードに婦人局が設けられ，1910年になると叙任された男性よりも多くの独身女性が宣教師に採用されたのである（Harris 1999: 161–162）。

既に述べたジョサイア・ストロングは当時のアメリカ・キリスト教界にあっては，社会的関心が強く，弱者にたいし敏感な感性を持った「良心的な」リベラル派の牧師であった。その彼が，キリスト教の側から，アメリカの帝国主義的膨張政策を正当化する理論を展開するまでになるのである。

19世紀末のアメリカは産業の発達により，国内市場だけでは足りず，海外市場も必要となった。そして海外膨張の遂行が一般世論となり，1898年の米西戦争では，フィリピン・プエルトリコ・グァムを占有し，キューバに軍政をひいて半植民地化した。また，この戦争中に，連邦議会はハワイ併合を決議し，それを領有することを宣言した。

ストロングは，フィリピンを例に挙げて，アメリカの海外膨張を以下のように正当化している。フィリピンは自己統治能力に欠けているので，十分に共和制を自分のものにするまでの間，アメリカが外国の干渉からフィリピンを守り，彼らを教育し，文明化し，キリスト教化すること。これがアメリカに与えられている使命であり義務である。そのためには，武力を用いることも「次善の選択」として肯定される。そして，「アングロサクソンにおける軍隊は，単なる破壊のための道具ではなく，偉大な再建のための組織である」と主張した（森 1994: 176）

ストロングは，アングロサクソンの新しい中心としてのアメリカに与えられた使命は，アングロサクソン文明を世界に伝えることだと考えた。そのアングロサクソン文明の内容とは，市民的自由を中心的価値とする政治体制としての共和制と，アメリカ的なキリスト教であった。すなわち，ストロングにとっては，海外伝道と政治的膨張政策は２つの別々のことがらなのではなく，アングロサクソン文明という１つのことがらの拡大に他ならなかったのである。彼は何の疑いもなく，「アメリカは最高の自由と，もっとも純粋なキリスト教と，最高の文明の代表である」と言い切ることが出来たのであった（森 1994: 173）。ストロングの言説では，19世紀のはじめの「福音」と「文明化＝アメリカ化」の一体化を，国際政治という文脈の中で見ることが出来るのである。

おわりに

アメリカン・ボードはルーファス・アンダーソンの下で，自治で，自給で，自ら宣教する現地教会の確立を目的としていた。アメリカン･ボードの意図は，現地教会を作り，出来る限り早い機会に外部からの援助をやめるものであった。ここで「現地教会（native church）」とは現地人聖職者が現地人の会衆によって経済的に支えられることを意味した。

アンダーソンは他の宗教は衰退してキリスト教が信仰されるようになると確信していたので，現地の宗教には関心がなく，調べようともしなかった。異教の土地の様々な文化・歴史的相違を考慮するということもなかったのである（Beaver 1967: 35–36; Phillips 1969: 270–271）。また，アンダーソンは，宣教地の人々を白人と同じ地位に置くことはなく，アメリカ人宣教師と現地人牧師とは地位が異なるとした。

近年，「現地教会」は，地域の会衆が宗教的活動を続けていくための牧師と物資を供給できる能力以上のことを意味するようになった。近年の「現地教会」とは，現地の人々の文化的環境の中で考えられ，生き続けるキリスト教である。つまり，宗教的内容が地域社会に根ざしたものを意味するようになっているのである（Hezel 1978: 252）。

*

本稿は，2004年11月13日に脱稿した。

その後，2005年３月に塩野和夫氏が『19世紀アメリカンボードの宣教思想　I 1810〜1850』という本を刊行した。この本のタイトルは私の論文のサブタイトルとまったく同じである。以下に，この本についての私の見解を記しておく。

塩野氏は『アメリカン・ボードの歴史（*The Story of the American Board*）』を書いたウイリアム・ストロングに倣って，アメリカン・ボードの歴史を①1810–1850年（植樹の時期），②1850–1880年（水を注ぐ時期），③1880–1910年（成長の時期）の３つの時期に区分する。塩野氏の研究は，それぞれの時期に１巻を当てた全３巻として刊行される予定で，このたび出版された第１巻は①の時期を扱ったものである。塩野氏は，３つの時期のいずれにおいても宣教師は多様な宣教活動に従事しているが，それぞれの時期に異なった宣教活動の重点があるとして，以下のように述べている。

> 第１期に広く認められるのは，それが伝道活動への足がかりを与えたとはいえ，教育活動である。第２期には教育活動から伝道活動へ重点の変化が認められる。この変化はボードの宣教方針の変更に起因した。第２期にはまた，高等教育と人権意識に基づいた活動の取り組みも始まっている。第３期に入ると，実業教育，医療活動，地域活動，さらに飢饉や伝染病に対する救援活動が各地で取り組まれた（12頁）。

この文章は塩野氏の未刊の部分も含めた19世紀のアメリカン・ボード研究の全体の要約であり，それは大筋において私の見解と一致する。しかし，氏の著作には私の見方と異なる箇所もある。

塩野氏は『ミッショナリー・ヘラルド』の1830年１月号に載ったアレキサンダー博士の説教を引いて，非キリスト教徒に対する宣教活動には，「キリスト教に文明が先んじる」とする，すなわち教育活動を重視する立場と，「福音を伝えること」，すなわち伝道活動を教育活動に優先する立場の２つがあったとする。そして，塩野氏は，①の時

期である19世紀の前期に，アメリカン・ボードは「宣教方針としては『福音を伝えること』を教育活動に優先させていた。しかし，宣教現場ではそのように機能しないで，教育活動が広範に取り組まれていた。このようにして，教育活動をめぐる本部の宣教方針と，現場における取り組みとの間に，差異が生まれた」とする（61頁）。

しかし，本文で示したように，19世紀の初めには，アメリカン・ボードの宣教現場では教育以外にも農業指導などの「文明化」政策が行なわれた。1817年に始まったチェロキー族のミッションの構成員に，宣教師や教員のほかに「農業従事者」や「技術者」がいたことは，塩野氏も記している（110–114頁）。また，1819年に派遣されたハワイ・ミッションにも農業従事者が加わっていた。農業従事者や技術者はアメリカン・ボードの本部から派遣されたのであるから，私は「文明化」政策は19世紀の早い時期のアメリカン・ボードの宣教方針であったと考える。本部は「福音」を方針としていたが，宣教現場で「文明化」の活動が行なわれていた，というものではないだろう。塩野氏がここで言うように，アメリカン・ボードの第１期の宣教方針が「福音伝道」であったとすると，「第２期には教育活動から伝道活動へ重点の変化が認められる。この変化はボードの宣教方針の変更に起因した」という先に引用した氏自身の記述と矛盾してしまうことになるのではないだろうか。

上記の点との関連でもう一つ指摘おきたい。アメリカン・ボードの宣教方針としての「福音伝道」政策は，ルーファス・アンダーソンの下で確立された。しかし，私の論文で示したように，宣教方針として「福音伝道」が述べられるのは，アンダーソンが海外通信担当幹事となった1832年以前からも始まっていて，それは次第に強調されるようになり，19世紀の半ばに確固たるものとなったのではないかと思う。この点は，アンダーソンの政策が考察されるはずである塩野氏の第２巻で言及されるかもしれない。

（2006年２月20日記す）

文　献

Anderson, Rufus
1870　*History of the Sandwich Islands Mission.* Congregational Publishing Company.
Beaver, R. Pierce（ed.）
1967　*To Advance the Gospel: Selections from the Writings of Rufus Anderson.* Wm. B. Eerdmans Publishing Company.
Blaufuss, Mary Schaller
2000　Goals of the American Madura Mission. Ph. D. Dissertation. Princeton University.
Bowden, Henry Warner
1981　*American Indians and Christian Missions.* The University of Chicago Press.
Davenport, William
1969　"The "Hawaiian Cultural Revolution": Some Political and Economic Considerations." *American Anthropologist* Vol. 71, 1–20.
Garrett, John
1982　*To Live among the Stars: Christian Origins in Oceania.* World Council of Churches.
ギュリック，アディソン（編著）
1988　『貝と十字架──進化論者宣教師J. T.ギュリックの生涯』（渡辺正雄・榎本恵美子訳）雄松堂。
Harris, Paul William
1999　*Nothing but Christ: Rufus Anderson and the Ideology of Protestant Foreign Missions.* Oxford University Press.
Hezel, Francis X.
1978　"Indigenization as a Missionary Goal in the Caroline and Marshall Islands." James Boutlier et. al.（eds.）*Mission, Church and Sect in Oceania.* The University of Michigan Press. pp. 251–273.
Hutchison, William R.
1987　*Errand to the World: American Protestant Thought and Foreign Missions.* The University of Chicago Press..
小檜山ルイ
1992　『アメリカ婦人宣教師』，東京大学出版会。
1997　「海外伝道と世界のアメリカ化」，森孝一編，『アメリカと宗教』，日本国際問題研究所，pp. 95–127.
Loomis, Albertine
1970　*To All People: A History of the Hawaii Conference of the United Church of Christ.* The Hawaii Conference of the United Church of Christ..
マドックス，ルーシー
1998　『リムーヴァルズ──先住民と19世紀アメリカ作家たち』，（丹羽隆昭監訳），開文社出版。
森　孝一
1994　「ジョサイア・ストロングにとっての米西戦争」，『基督教研究』55（2），161–179。
1996　『宗教から読む「アメリカ」』，講談社。

中山和芳
1997 「植民地状況におけるキリスト教の役割──ミクロネシア連邦，コシャエ島とポーンペイ島の事例」，山下晋司・山本真鳥編，『植民地主義と文化：人類学のパースペクティヴ』，新曜社，pp. 99–126.
Phillips, Clifton Jackson
1969 *Protestant America and the Pagan World: The First Half Century of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1810–1860.* Harvard University Press.
柴野智子
2001 「一九世紀末期アメリカン・ボードの伝道・教育方針の形成──北中国ミッションにおける高等教育機関創設を巡って」『キリスト教社会問題研究』50 : 31–71.
塩野和夫
2005 『19世紀アメリカンボードの宣教思想　I　1810〜1850』，新教出版社。
Strong, William E.
1910 *The Story of the American Board: An Account of the First Hundred Years of the American Board of Commissioners for Foreign Missions.* The Pilgrim Press.